



**Data**

監督: 黒沢清  
脚本: 濱口竜介/野原位/黒沢清  
出演: 蒼井優/高橋一生/坂東龍汰  
/恒松祐里/みのすけ/玄  
理/東出昌大/笹野高史

## 👁️👁️ みどころ

黒沢清監督、ベネチアでの銀獅子賞おめでとう！これまでの、ホラーとサスペンス色に満ちながらエンタメ色も社会問題色もタップリという独自路線を、初の歴史ドラマ挑戦の中でも貫徹！

日米開戦間近の1940年という時代に、神戸で貿易商を営み、ガッポリ儲けているこの男、かつて孫文を応援した宮崎滔天と同じようなスパイ・・・？そして、無邪気にそれに従っているこの女は、スパイの妻？満州から連れ帰った女もヤバいが、持ち帰ったノートと8ミリフィルムはもっとヤバい。そこには、どんな国家機密が？

亡命しかない！そんな決意は一体どこから？その計画は？成否は？この程度の密航計画ではちょっとムリ？案の定、スパイの妻は検挙されたが、その後のあっと驚く展開は？

大ヒット上映中の『鬼滅の刃』ばかりに目を向けず、こんな社会問題提起型娯楽作(?)も、こりゃ必見！

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

## ■□■ 昨年はポン・ジュノ、今年は黒沢清監督！おめでとう！ ■□■

2019年5月の第72回カンヌ国際映画祭でパルムドール（最高賞）を受賞したのは『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）のポン・ジュノ監督だった。第92回アカデミー賞でも、同作はさらに作品賞、監督賞等4部門をもたらした。他方、2020年9月の第77回ベネチア国際映画祭は、黒沢清監督の『スパイの妻』に銀獅子賞（監督賞）を授与した。

『パラサイト 半地下の家族』は、韓国で深刻な社会問題になっている“格差”をテーマにした、ミステリアスかつ少し怖いところもあるが、それでもやっぱりエンタメ作品と

いう、いかにもボン・ジュノ監督流の不思議な魅力の映画だった。他方、今や巨匠と称される黒沢清監督も、当初は『CURE キュア』（97年）、『ドッペルゲンガー』（02年）（『シネマ3』347頁）、『LOFT ロフト』（05年）（『シネマ12』91頁）、『叫』（06年）（『シネマ14』399頁）等でホラーとサスペンス色に満ちながら、エンタメ色もタップリ！社会問題提起性もタップリ！という独自の映画路線を目指してきた。そして、近時『Seventh Code セブンス・コード』（13年）、『岸辺の旅』（14年）、（『シネマ37』247頁）、『ダグレオタイプ の女』（16年）、『散歩する侵略者』（16年）（『シネマ40』70頁）等ですべてその路線を続けてきた。

本作は、1940年という時代を軸に描いた黒沢清監督初の歴史ドラマだが、常に著名人物を主人公に据えるNHKの大河ドラマ（歴史ドラマ）とは違い、本作の主人公はすべて架空。そして、ストーリーもすべて架空のオリジナル脚本に基づくものだ。しかも、タイトルが『スパイの妻』だから、今どきの平和で豊かな日本国には全く似つかわしくないものだ。私が本作を観た10月17日は、異例の大量スクリーンで公開中の『鬼滅の刃』を目指す若者と子供連れの家族でいっぱい。今年2月のコロナ騒動以降はじめて見る映画館の賑わいぶりだった。本作が年配客ばかりながらも満席だったのは「銀獅子賞」受賞効果によるもので、それがなければ、こんなタイトルの邦画に大入りするはずはない。その意味でも、黒沢清監督の銀獅子賞受賞は大きな価値がある。しかして、本作はどんな映画？ また、蒼井優演じる「スパイの妻」とはどんな女？

## ■□■宮崎滔天が神戸なら、福原優作も神戸！■□■

『宗家の三姉妹』（97年）では、同志・孫文を応援するチャーリー宋の商売の繁栄ぶりが目立っていた（『シネマ5』170頁）。また、NHKで特集した宮崎滔天の番組では、日本にやって来た同志・孫文を応援する宮崎滔天の神戸での商売繁盛ぶりが目立っていた。しかして、本作では、宮崎滔天と同じように、神戸で福原優作（高橋一生）が営む貿易商・福原物産の商売繁盛ぶりが示される。

そんな優作を久しぶりに訪れてきた津森泰治（東出昌大）は、優作の妻・聡子（蒼井優）の幼馴染だが、今は憲兵分隊長として第一線の任務に当たっているらしい。時代は1940年、太平洋戦争開戦直前の微妙な時期だ。優作は、「商売だ！」「貿易だ！」と言って、太っちょの英国人商人ドラモンドと今日も会っていたが、1941年7月には「ABCD包囲網」を敷き、開戦後は「鬼畜米英」と呼ばれたイギリスから神戸に来ているこの英国商人は、ひょっとして英国のスパイ・・・？優作がそんな考えになびかないなら、聡子はもっと天然（？）で、無邪気に（？）夫を信じているらしい。したがって、あの時代には不釣り合いな立派な洋館に住み、美しい洋装姿で、英国仕込みのウイスキーを泰治に勧める聡子は如何にもノー天気に見えるが・・・。さて、これは聡子の本性？それとも、お芝居？

## ■□■満州から女連れで帰国！女が死体に！こりゃヤバい！■□■

『戦争と人間』3部作（70年、71年、73年）（『シネマ5』173頁）は、日本と大陸（満

州)を股にかけて繁栄する五代財閥の面々を中心に、歴史と革命、そしてさまざまな恋愛模様が展開していった。五代財閥にとって満州は日本と同じ日本の領土だったが、本作の優作にとっての満州は？彼が「来月、ひと月ほど満州に行く」と聡子に言った表向きの理由は、「本当に危なくなる前に、大陸をこの目で見ておきたい」ためで、「大陸で映画も撮る」とも言っていたが、2週間も遅れた帰国時には、聡子に内緒で、草壁弘子(玄理)という女を連れ帰っていたから、アレレ・・・？

舞台は変わって、1940年の忘年会。福原物産では、ささやかな食事会の後に、社員全員に賞与として砂糖と餅が配られたから、社員は大喜び。そこで、優作の甥の竹下文雄(坂東龍汰)が「お伝えしなければならぬことがあります」と切り出したのは、会社を辞め、有馬の旅館「たちばな」に籠って戦争をテーマにした長編小説の執筆へ取り組むという報告だった。しかし、それってホント？貿易会社の社員がいきなり会社を辞めて小説家に転身できるの？本作は濱口竜介と野原位の脚本で、時代設定も人物設定も興味深いうえ、クライマックスからラストにかけての面白さも抜群だが、文雄の人物設定と、文雄の扱いは少し雑。これは、優作と聡子の物語を主軸に据えて2時間の映画にするためにはやむを得ないかもしれないが・・・。

その後、アメリカの対日輸出制限が始まり、日米開戦が現実的なものになり始めたが、ある日、神戸の港に女の白い身体が浮かび上がったから、さあ大変。泰治から神戸の神戸憲兵分隊本部へ呼び出された聡子は、この女・弘子を満州から連れ帰ったのが優作だと聞かされてビックリ！聡子が優作を信頼している様子は導入部から一貫して描かれているが、さすがにここまで怪しいデータが揃えば、聡子の嫉妬心が燃え上がったのも仕方ない。しかし、聡子の追及に対する優作の答えは、「やましいことは何もない。僕を信じるのか、信じないのか」というもの。これで夫婦ゲンカが収まれば苦労はない。そして、スクリーン上での聡子の答えは「・・・信じます」だったから、やれやれだ。しかし、これってホントの聡子の気持ち？

## ■□■女もヤバいが、このノートはもっとヤバい！■□■

文雄が有馬の旅館「たちばな」に籠って何をしていたのかは、優作が弘子を満州から連れ帰ったことの真意を「たちばな」の部屋の中で文雄に問い詰める聡子に対する、文雄の返事を見れば明らかになる。「あなたには、分かりようがない！」と声を荒げていた文雄だったが、突然何かを悟ったかのように態度を変えた文雄が聡子に手渡したのは、油紙に包まれた1冊のノート。文雄は「叔父さんには“英訳が終わった”とだけ伝言を」と言っただけだったが、そのノートには細菌兵器の研究に伴う人体図と解説が記されていた。こりゃヤバイ！女(弘子)もヤバいが、このノートはもっとヤバいのでは・・・？さあ、これについての優作の説明(弁明)は？

本作で聡子役を演じた蒼井優は、『花とアリス』(04年)、『シネマ4』326頁)、『フラガール』(06年)、『シネマ12』52頁)、『百万円と苦虫女』(08年)、『シネマ20』324頁)、

『彼女がその名を知らない鳥たち』(17年)、『シネマ41』57頁)等での演技が光る演技派若手女優だが、本作では演劇調のセリフ回しが一つの特徴。それはとりわけ、聡子と優作、聡子と文雄、そして、聡子と泰治の「2人芝居」で顕著だが、そこに黒沢清監督の厳しい演出があったことは想像に難くない。仲代達也が演出するシェイクスピア劇や、亡くなった劇団四季の創始者・浅利慶太が演出するミュージカルは、オリジナル劇だから独特のセリフ回しが当然だが、本作のそんな対話場面での演劇的なせりふ回しは、映画としては少し違和感がある。しかし、あの時代、あの状況、あの場面なら、あえてこんなセリフ回しのほうが、ゾクゾクとする緊張感が・・・。

### ■□■亡命しかない！そんな決断に妻は？■□■

本作を鑑賞した直後に、私は録画していた10月1日(月)のNHK「世界のクロサワ『スパイの妻』を語る～ベネチア国際映画祭17年ぶりの快挙～」を見た。そこでの国谷裕子アナウンサーによる黒沢清監督のインタビューを聞き、スクリーン上のシーンを再度確認していると、より一層黒沢監督の狙いがわかり、興味深かった。宮崎滔天がなぜ財産も命も投げうって孫文を応援したのかは、それなりに納得できる。しかし、本作では、優作がアメリカへの移動が不可能となった状況下、なぜバスの中で聡子に「亡命しかない！」と耳打ちしたのかは、十分納得できるわけではない。後に「僕はコスモポリタンだ」というセリフも登場するが、1940年当時、いくら進取性に富んだ貿易商の優作といえども、そんな言葉を使っていたとは、私には到底考えられない。

また、いくらそれが正しい道だと信じていても、会社はもちろん、本作に全く登場していないが、優作の両親をはじめ、福原一族を犠牲にしてまで、あのノートを持ってアメリカへの亡命を決意することには、いささか違和感がある。もっとも、その点は脚本の出来にかかると、スクリーン上における興味は、夫のそんな決断に妻がどう対処するのかの一点に集約されていく。そこで、聡子の口から出たセリフが、「あなたがスパイなら、私は喜んでスパイの妻になります」というもの。そして、それ以降、聡子は嬉々として(?)夫と共にアメリカへの亡命準備を整えていくが・・・。

### ■□■この程度の工夫で亡命できるの？優作の戦略と戦術は？■□■

日本と中国は近いが、太平洋で隔てられている日本とアメリカは遠い。したがって、少なくともその分だけ亡命は難しくなる。しかし、本作後半からは、亡命に向けて優作と聡子が協力し合う風景が描かれるが、その点についての黒沢清監督の演出は如何に？

まずは宝石など金目のものを現金に換えることからのスタートだが、夫と共に命を懸けて共通の目的にまい進する聡子は毎日イキイキ、しかもホントに楽しそう。亡命に向けての戦略と戦術はすべて優作の頭の中が生み出すものだが、そのアイデアに対して聡子が提案し修正を加えていくプロセスは面白い。その過程の中で、ヤバイものはノートの他に、優作が満州で撮影し持ち帰った8ミリフィルムもあることが“露見する”から、聡子の知

的レベルも相当なものだ。

最終的に優作が決めた戦略は、優作と聡子が別のルートで亡命すること。そして、その戦術の一貫として聡子は一人でアメリカ行きの船の中に身をひそめることになったが、そんなことが本当に可能なの？もちろん、船内には優作の意向を受け、謝礼金もタツプリ受け取った仲間がいるが、彼らはホントに信用できるの？ここらあたりは本来のスパイ映画なら、脚本の精緻さが競われるところだが、本作はそんな映画ではないので、濱口竜介と野原位の脚本は少し甘いところがある。“タイタニック”の船内には車まで積み込んだ巨大な荷物置き場があり、ジャックとローズはその中で“初体験”を済ませていたが、優作の意を受けた船員から、聡子が入るように命じられた木箱はお粗末なもの。「食事は2回、トイレはこのバケツで」と言われた聡子は、本当に数十日間もこんな箱の中で生活できるの？スクリーン上で観ている限り、そんな聡子に私は不安でいっぱい。他方、聡子と別行動をとっているはずの優作は、今どこでどうしているの？

### ■□■すぐに官憲が！聡子はあっけなくタイホ！しかし・・・■□■

大きな木箱には穴が数か所開けられたから、そこから辛うじて光が入ってくる。そのため聡子は一安心。ところが、船が出港したかどうかもわからないうちに外で物音がするので、穴からのぞくと、官憲が踏み込んできているからアレレ・・・これにてあっけなく聡子は逮捕され、泰治の尋問を受けることに。文雄が英訳したノートは優作が持参していたから大丈夫だが、聡子が持っていた8ミリフィルムはノート以上にヤバイ証拠品。これを見たのは優作と文雄と聡子だけだったが、今は聡子を同席させようえ、泰治支配下の官憲たち全員が、それを“検分”することに・・・！私は司法修習生時代の検察修習で、某ワイセツ事件の証拠として押収したいいわゆる“エロビデオ”をお仕事として“検分”したことがあるが、スクリーン上ではそれと同じような風景が・・・。

あのノートには人体実験の記録が書かれていたが、この8ミリフィルムはそれを生々しく撮影したものだから、これが官憲の手に渡れば聡子と優作は完全にアウト！こんなものをアメリカに渡すために亡命したことが明らかになれば、間違いなく2人とも死刑だろう。そう思いながら8ミリフィルムの試写会(?)の風景を見ていると、そのスクリーン上に登場してきた人物は・・・？アレレ、これは一体ナニ・・・？

### ■□■優作の生死は？優作はスパイ？聡子はスパイの妻？■□■

日本の敗戦は1945年8月15日。また1945年3月10日の東京大空襲に続いて、3月13日～14日には大阪が、さらに3月17日には神戸が大空襲された。神戸への大空襲のものすごさは、野坂昭如の原作を映画化した『火垂るの墓』(08年)、『シネマ20』280頁)や、大ヒットした『この世界の片隅に』(16年)、『シネマ39』41頁)でも描かれている。

しかして、聡子の取り調べ(試写会?)に続くシークエンスは、聡子が収容されている

精神病院のある神戸が空襲にさらされるもの。あの時代の精神病棟がこんなにもいい待遇であることには驚かされたが、空襲が激しくなると、それが解放されたから、さらにビックリ！この点でも本作の脚本には少し疑問があるが、それはともかく、聡子はこの時ホントに精神異常をきたしていたの？興味深いのは、その点だ。黒沢監督はその点を明確にするべく（？）、入院中の聡子を野崎医師（笹野高史）が訪問するシークエンスを設けているのでそれに注目！そこでの会話は短い、聡子の次のセリフに黒沢監督が映画作りの中で問い続けてきた“個人と国家の関係”が集約されている。それは、「私は狂ってなんかいません。でも、狂っていないことが狂っているんでしょうね、この国では」だ。さあ、狂っていたのは聡子？それとも、日本国そのもの・・・？

本作のラストからクライマックスにかけてはそんなスリリングなシーンの連続だが、面白いのは、そこに優作が全く登場しないこと。その対比はお見事だ。そして、すべての物語が終わった後に、優作の死亡が通知されたこと、しかし、その真偽は不明であることが字幕表示され、さらにその後、聡子がアメリカに渡ったことが字幕表示される。なるほど、なるほど・・・。少なくとも聡子はこの展開に十分納得しているようだが、さてあなたは・・・？

あの時の亡命決行に際して、あえて聡子と別行動をとった優作は、今どうしているのだろうか？とつくに土の中？それとも・・・？

2020（令和2）年10月26日記